

楽しく儲かる農業 みつけた

2023 August Vol.234

8 月号

静岡農業技術支援協同組合 発行

役に立つ情報満載!
ニュースレター



変化する農業技術

薬剤で土壤消毒をすると土の中から生物が消える!

玄米アミノ酸微生物農法

雨降り続きの日照不足はどう対処すればいいのか…?

玄米アミノ酸微生物農法Q&A

Q. オクラの樹勢が悪い処の改善方法を教えてください

農業経営と世界の変化

食糧危機になれば、ぜいたくで豊かな食生活は
持続不可能になる!

作物

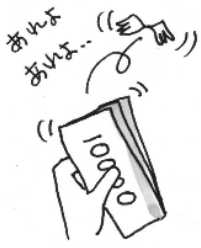
「緑肥」は土壤改良の切り札になる!
乳酸菌もみがらぼかしと併用で効果抜群!



薬剤で土壤消毒すると

土の中から生物が消える！

暑い時期になると「土壤消毒」というのをやる。以前は太陽熱消毒とか、水を張って嫌気性にする消毒が主流だった。現在は薬剤による消毒が主流になっている。3回連続して薬剤の話になる。除草剤から一般的な消毒、そして土壤消毒と、いかに薬剤にお金をかけているかということになる。トータルをしたら、これだけでも10アール30〜40万円にはなってしまうのではないだろうかと心配される。特に土壤消毒代の薬剤は高い。なぜ土壤消毒がこんなにも普及したのだろうか。最近10年前からの話ではないだろうか。病害や虫害が出ると薬剤による土壤消毒が一般的になりつつある。



薬剤で土壤を消毒することは、土の中の微生物を死滅させるということである。悪玉菌も死ぬが良い菌も死ぬということである。土の中に生物多様性がなくなるということになり、土がポイントになる。土の中は見えない。生物多様性があるかなしか、目で見てもわからないのである。生物は見えないけれども「土」には明らかに変化が出てくる。土の中から生物がいなくなるわけだから、まず酸素がなくなる。土に弾力がなくなる。

例えば綿の布団に空気がなくなるとペチャンコになる。寝ていても寒い。暖かくない。



土も同じ状態になる。寒暖の影響をとても受けやすくなる。雨の吸収力もなくなる。寒い時はいきなり温度は下がる。逆に暑くなると気温は急上昇になる。少しの雨では場は水浸しになる。晴れると力チン力チンに硬くなる。土の中に生物が少なくなるわけだから当然の結果である。いや！そんなつもりではない：病害、虫害が出ないようにしただけだよ、というかもしれない。病害、虫害では済まないのがある。土の中に生物性がなくなったら土はどれくらいもつのだろうか。いつまで栽培できるかである。長くても10年ではないだろうか。薬剤による耕作放棄地は増加していくことになる

かもしれない。そのようになったら、どのようにして農地を回復させるのだろうか。実は方法は存在しないのである。



そのまま放置して自然回復を待つしかない。20年かかるのか、30年かかるのか、誰もわからない。土壤の薬剤消毒は、なぜ暑い夏に行うのか。冬に土壤消毒をやる人はいない。なぜ夏なのだろうか。薬剤の効果は気温が高い時に、もっともよく出てくるからである。殺菌力の効率が一番高いということである。気温が高い時の消毒は薬害と紙一重なのである。常に薬害の危険があると考えて、間違いはないのである。

玄米アミノ酸 微生物農法

雨降り続きの日照不足は

どう対処すればいいのか…？



雨が多く日射量
通常は作ってお
くべきである。

雨が多く日射量

8月はターニングポイントの月である。秋冬の仕事が始まるからである。育苗、播種を控えている。昨年の9月を思い出してほしい。**雨が続き、日射量は極端に少ない。**秋冬の育苗、発芽に影響するだけでなく、9月収穫予定の作物にも大きく影響してくる。台風もなんと日本の近海で発生する有様である。北海道が大打撃を受けて、タマネギ、ジャガイモは驚くような高値になった。これが前倒しになる可能性がある。益明けから、昨年9月のような気候になるかもしれない。それを見越して8月の仕事なのである。**雨が来ても大丈夫なように排水対策を**

ように排水対策を
することである。特
に**明渠は大切だ。**

通常は作ってお
くべきである。

雨が多く日射量

が少ないのは、**玄米アミノ酸酵素液の葉面散布**で補うことができる。えー雨が多いのにな…と思うかもしれない。それでも**玄米アミノ酸酵素液の葉面散布**は大変な効力が出るのである。事実、昨年の異常な8月、9月でも、しっかりと葉面散布をした方は収量が伸びただけではなく品質も良かった。特にミカンなどは雨が多いと、浮き皮が大発生する。糖ものらない。光合成をしていないのだ。光合成をさせるには、遊離アミノ酸が必要になる。アミノ酸は生命の源である。

虫の心配もしなくてはいけない。害虫は6月ぐらいから出ているとは思う。8月、9月になると、さらに多く発生してくる。冬に備えているのだ。最近はや暖冬で越冬する害虫が多くなった。害虫の量は減るところが増える一方である。特に心配されるのはイナゴだ。



エジプトはイナゴの大発生によって、深刻な食糧危機を歴史上何度も経験している。土壌汚染が進行するほどに害虫は大型化していく。山の近くで大型の鳥獣害が大発生しているのと同じ傾向である。

害虫はチツソの多い所や、弱い作物から食べ始める。大型化するに連れて強い作物に移っていく。害虫だけは「**農薬**」で対処するしかない。この時も**玄米アミノ酸酵素液**を使う。**玄米アミノ酸酵素液**を50倍に希釈して、**農薬**はメーカー指定の最大倍率にする。500〜1000倍なら、1000倍である。しかも使う時期がある。朝方早く害虫が動かない時、さらに**害虫が小さくて** **出始めの時である。**害虫は葉の裏

側につく。表にはつかない。しかも展着剤はいらないのである。



葉の裏側まで回る霧状散布が望ましい。農薬で害虫被害を止めておいてから、**玄米アミノ酸二ム酵素液**で追いかける。特に巻き野菜のアブラナ科のもので、**キャベツ、ハクサイなどは早めの対策が必要である。**もちろん予防剤としても効果的で、同じ使い方である。**玄米アミノ酸二ム酵素液の後には玄米アミノ酸酵素液**で追いかける。いかに生長力を止めないで栽培を進めるかということが重要なのだ。現在収穫中のもの、9月収穫予定のもの、育苗、播種にしても、害虫に対しては**早めの対策が絶対条件である。**

玄米アミノ酸微生物農法 Q & A

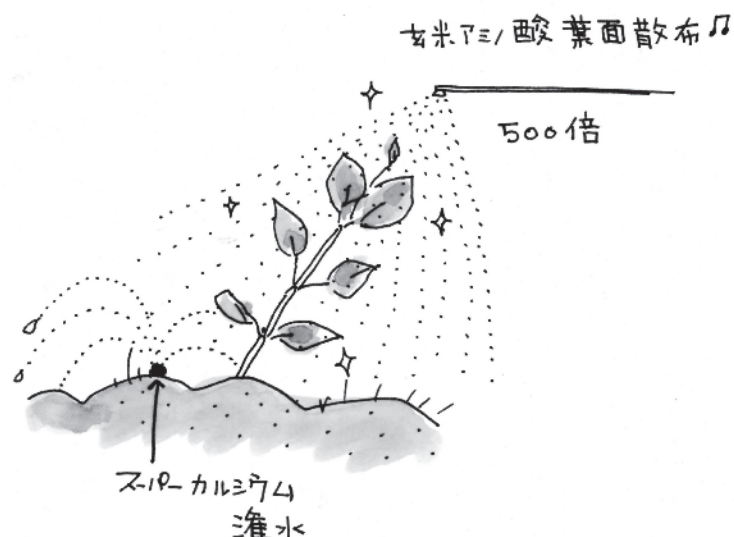
Q オクラの樹勢が悪い所の改善方法を教えてください。

本年もオクラを栽培しています。栽培面積10アールです。
5月1日に播種し現在多少の開花が見られます。
アミノ酸酵素液とスーパーカルシウムの混合散布をしたいと思います。
散布してよろしいでしょうか。
蕾が落ちて開花不足になっております。また樹勢が良い所と悪い所があります。
何か対策がありませんか。
ご指導のほどよろしく願いいたします。

鹿児島県 M様より

A 玄米アミノ酸液の葉面散布で光合成を促進させてください。

茎葉が育っていればドンドンアミノ酸の葉面散布をしてください。
500倍です。毎日でもいいです。
樹勢の悪いところはスーパーカルシウムを灌水してください。
週に1回樹勢が戻るまでやってください。
蕾が落ちるのは肥料過多です。
液肥は控えてください。その方が開花率は上がります。



食糧危機になれば、ぜいたくで豊かな食生活は持続不可能になる！

食糧危機といっても漠然とはしていない。世界的に人間の食べるものは三種類である。小麦、大豆、米である。いずれも重要なタンパク源である。この三つが足りていれば飢餓ということはない。野菜や肉や魚だって、必要じゃないの：それは現代の食生活を考えるからである。日本の食生活だって、ご飯（白米）が中心で、みそ汁と漬物で生きてきたのである。現在の食生活が異常なのである。現在のような食生活は50年続いているにすぎない。それまでの食生活は、まったく違っていた。豊かな食生活になって、それは望ましいことであるが、続けられるのかである。食糧は生産しなければ生まれてこない。生産者は、いなければ何もないということである。



現在の食生活の豊かさは輸入によって支えられている。自給率が下がるほどにそうなる。円高の時には気にならないが、円安になってくると驚いてしまう。国産よりも輸入品が高いということになってしまふのである。しかも日本給料は上がっていない。割高感を実感として感じられるようになると思う。一度、食生活をぜいたくにするとは習慣は変えにくいものである。しかも外食やコンビニ、スーパーの中食などが中心となると余計に習慣を変えるのは、難しいことになる。自分で作って工夫するなど、できることなく

なる。おいしくなるのは問題がないけれども、その逆は我慢できるのだろうか。作物の栽培も肥料代などが、値上がりしたとすると、現在の品質を保持できるのか疑問になってくる。



高品質のものは奪い合いになるのかもしれない。日本には、おいしい米がある。そう思っているかもしれない。でも高気温が続けばジャポニカ米よりもインディカ米になるのかもしれない。そうなればピラフか雑炊になる。炊きたての白いご飯ではなくなってしまうのである。それでも食べられるだけ感謝である。生き物や作物というのは自然環境が変化してしまうと、すべてが変化してしまうのである。そうなれば食文化だって変化することになる。旨味の元になる鰹の漁獲量や鰹節は減少

傾向にある。日本ではそうだが外国で水揚げされる漁場では鰹節まで生産されるようになってくる。日本の特許ではなくなりつつあると言っても良い。日本の会社が現地生産をすることもあ



温暖化すれば海流も変化して漁場も変化する。作物だって同じである。高気温に適応した作物が食べられるようになる。しかし小麦、大豆、米、トウモロコシという主流の食品を変えようというのは大変なことである。同時に野菜も高気温に適応したものになる。肉も同じである。和牛は寒さに強いが暑さに弱い。野菜も暑さに強いものが主流になるかもしれない。エジプト原産のオクラとかである。しかし現在のような、ぜいたくで豊かな食生活を望むことは無理だと思う。

作物

「緑肥」は土壤改良の切り札になる！

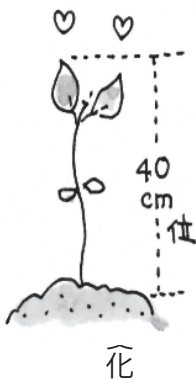
乳酸菌もみがらぼかしと併用で効果抜群！

土壤消毒は8月に行う人が多い。最近は薬剤が主流になっている。しかし薬剤には大きな欠点がある。土壤の微生物が死んでしまうのである。土の中の生物多様性がなくなってしまうのである。生物多様性がなくなるということは土を育てる力がなくなるということである。土壤消毒よりも、もっと良い方法がある。「緑肥」である。緑の肥料である。肥料になるということは土の中の生物多様性を高めてくれるということである。緑肥は難しいのではないと思う人が多いかもしれない。8月の1ヶ月があれば十分に可能である。



やり方は次のようである。まずプライソラで深く耕す。次に有機石灰と天然ミネラル鉱石を10アル50kgずつ散布して、さらに、すき込みをする。次に緑肥をまく。

緑肥はメーカーからカタログを取り寄せする。種はメーカー指定の3倍量である。種は必ず、玄米アミノ酸酵素100倍液につけて芽出しをしてから散布する。土の上から散布するだけで良い。雨の降っている時なら、さらに良い。2日ぐらいいで新芽が出てくる。8月は気温が高いから新芽が出たら、その後は、とても伸びが早い。40cm前後に成長させる。20〜30日の間である。25日が目安か、なぜ40cm前後なのか、緑肥とは何か、何が肥料になるのか、何の肥料になるのか、それは葉緑素である。葉緑素は若葉に多い。成長したら少なくなる。そのために若葉が少し成長した40cm位が、丁度、良いのである。何の肥料になるのか。微生物の工サである。微生物が爆発的に増える。



するのである。なぜメーカー指定の3倍なのか。量が多いほど成長が早い。量が多いほど葉緑素の量は多くなる。40cmになったプライソラで下から持ち上げて土のすき込みをする。一週間で見事に分解する。緑肥が分解すれば土は劇的に変化する。



その後に乳酸菌もみがらぼかしのすき込みをする。土は見違えるように変化する。土壤消毒を薬剤でやれば費用も高く、土にも悪い。緑肥を使えば土は生き返り、その後の作付する肥料も、わずかで済む。作物の生育も良くなる。これは天と地ほどの大きな差になる。土壤消毒を続けると10年以内に何も育たなくなってしまう。しかし緑肥は毎年、土が良くなっていくのである。コストも安い。手間も少ない、緑肥は是非、おすすめである。

商品のお申込は ライフメールまで

ネットからのご注文はこちら
※ネット決済が可能になりました



玄米アミノ酸微生物農法・商品一覧
<https://aminofarming.com/collections/products>

玄米アミノ酸微生物農法
<https://aminofarming.com/>

FAX ☎0120-870-442 <24時間FAX受付中>

お問い合わせはメールかFAXでお寄せください！

Mail info@shizuoka-agrisupport.org

<24時間メール受付中>

静岡農業技術支援協同組合

〒422-8034 静岡県静岡市駿河区高松2-15-26

月～金 (9:00～17:00) 土・日・祝・年末年始(休業)